軽井沢シンフォニックコーラス
TUTTI 第６７号
2026.08.07

鈴木さんのご紹介：

小松 照幸（ ベース ）

軽井沢生活を始めた１０年前、荒れ地で何もない自宅の敷地に、息子達２家族の夏休合宿用として離れに簡素なゲストハウスを建てました。その第一号のゲストが鈴木さん家族です。

背の高い寡黙なジェントルマンの印象だった彼は、暫くして、中軽井沢の「ツルヤ」と軽井沢が大好き人間と分かりました。食文化に関しては、中部圏を中心に物珍しい食品の在処に精通しており、食べ物のお話を始めると、何と広域に現地訪問しておられるのか、と驚きます。なにしろ名古屋―軽井沢間の約４００キロを、日帰りで「ツルヤ」へ訪れる人と知り、びっくりしました。

それを切っ掛けに、懇意な付き合いが始まり、我が家ではパソコンやオーディオの不具合を修理頂き、また一音が鳴らなくなった電子ピアノも、自前で取り揃えたプロ仕様の電子機器道具を使い、すべてをバラし組み直し、なんと１０年以上壊れた電子ピアノが蘇りました。

分かり安く人物評をすれば、「一家に一台、鈴木さん」です。本職は、病院の臨床検査技師ですが、コンピューターの造詣はプロであり、音楽は永くバンド活動でキーボード担当でした。鈴木さんの多趣味、博識と行動力に脱帽です。

音楽好きな彼は、軽井沢シンフォニックコーラスが参加するフォレストコンサートをこれまで毎回鑑賞され、先日たまたま我が家で立ち話しをされた大林団長から是非にとお誘い頂き、TUTTI に寄稿されることになりました。

吹奏楽と私

鈴木 雅弘（ テノール ）

私は、名古屋在住で、軽井沢シンフォニックコーラス団員の小松夫妻と 10 年以上家族的な付き合いをしております。

本題に入る前に私の略歴を少し。

小中高ともに名古屋市内の公立で、大学は名古屋郊外の医療系の大学。大学卒業後は、臨床検査技師として 2022 年まで名古屋市内の医療法人の臨床検査室に勤務していました。

私は、病院勤務時は、患者様の血液や尿の検査・分析をはじめ、心電図や超音波検査の他、病院内のコンピューターシステムのメンテナンスや各システム（医事・検査・放射線）の連携のプログラム作成などを行っていました。

音楽との出会い

幼稚園から音楽教室に通い、小学校入学後はエレクトーンを高校３年の夏まで続けていました。なぜ止めてしまったかというと、上級になるたびに課題がきつくなり学業との両立が難しくなったのと、当時の機種での表現の限界を感じてしまったためです。近年の機種は音色データやリズムのプログラムにより表現の幅が広がり当時に比べかなり簡単になっています。

吹奏楽との出会い

小学校５年生の時に運動会の開会式にトランペットでファンファーレするということになり、そのファンファーレ隊の一人に選ばれ、その時がトランペットとの出会いです。しかし、記憶に残っているのは授業後居残り練習だけで、本番でどのような演奏だったかは記憶に残っていません。

次にトランペットを吹くのは中学１年生で、運動会の開会式での入場行進時の演奏で、元々、通っていた中学には吹奏楽部はなく、その時だけ寄せ集めで少人数でした。この時の演奏も記憶に残っていません。また、指揮をしていた社会科の先生が翌年、他校へ移動してしまったため、その年が最後でした。

本格的に吹奏楽に向かい合ったのは大学に入ってからです。かなりのブランクがありほぼ初心者状態からのスタートになりましたが、入った部活がコンクールを目指すわけでもなく、定期演奏会や学内の音楽会や体育祭での入場行進と入学式後の祝宴での演奏がメインだったのでゆったりと吹奏楽を楽しむことができました。

なぜ、大学に入って吹奏楽と思われるかもしれませんが、創設者であり当時の学長だった方は医学の他に音楽に造詣が深く、学内のホールは、講義・講演に使用する他に、演奏会用に反響板があり、またピアノは「Bösendorfer 290 (ベーゼンドルファーインペリアル)」と「YAMAHA C7」がホール備品にあり、著名な演奏家を迎え演奏会も開かれていました。そんなことから音楽系の部活を探すと吹奏楽と弦楽が大学直轄の部活動であり、使用する楽器は貸与が可能であったため、今までの経験を考え吹奏楽部を選択したのです。(私は、個人持ちのトランペットは持っていません)

私は、「俺が、俺が」という性格ではないので（目立つことを好まない)、１st よりもソロパートのほとんど無い 2nd や 3rd トランペットでハーモニーを楽しんでいました。ただ、トランペットはＢ♭調（「ド」と吹くと「シ♭」と聞こえる）のため、耳で聞こえる音程と異なるため当初は苦労しました。

楽曲は、オリジナル曲（吹奏楽用に書き下ろされた楽曲）やポップスやクラシックの吹奏楽アレンジされたものがメインと行進曲。そして、音楽会で弦楽との合同演奏つまり「管弦楽」としてのクラッシック曲の演奏がありました。弦楽との演奏もとても楽しいものでした。ただ、譜面がスコア（総譜）からの書き写しで、たまにトランペットが A 調や C 調で書かれているものがあり、移調して書き写す手間があったのを覚えています。

当時、演奏した中で今も思い出に残っているのは、吹奏楽はエルガーの威風堂々、管弦楽では、ヨハンシュトラウス 1 世のラデツキー行進曲です。

そんな吹奏楽部ですが、私が卒業した翌々年には廃部となり、弦楽と合併し管弦楽部として現在も活動中です。

個々の音が合わさり一つの楽曲を演奏会で演奏する以外にも、音楽として形になるまでの過程が私は好きです。その過程で得られたものが積み重なり、新たな楽曲への糧になり、より良い演奏になるのだと。

新たな出会い

大学卒業後、就職して直属の上司は同じ大学の卒業生であり且つ吹奏楽部の先輩（私が入学したときはすでに卒業していた）であったにも関わらず、吹奏楽からは遠ざかってしまいました。しかし、その数年後、ローターアクトクラブ（ロータリークラブが提唱した青年のクラブ）に入会後、私がキーボード担当で他クラブの有志でバンドを結成し、クラブ定年（当時、ローターアクトクラブは「30 歳定年」）まで行事等で演奏をしていました。もう一人のキーボード担当は、のちに私の妻となる女性です。

そのバンドでは Fusion のコピーを演奏し、後にライブ知り合った仲間に誘われて別のバンドに加入したりしていました。（加入した一つのバンドのボーカルが大学時代の同級生でした）。それぞれの演奏ジャンルが異なり、そのバンドに合った機材を調達したりしました。

吹奏楽で培った合奏の楽しみを実践できた時間（期間）でした。コロナ禍でいったん中断し、再開のめどが立っていないのが残念です。

最後に

自分で演奏するものが吹奏楽からすっかり離れてしまいましたが、今も吹奏楽への思いは変わりません。もうトランペットを吹くことは難しいかもしれませんが、さまざまな団体の演奏に触れるたび、今でも心を動かされます。

その後のアイコサン

岡田 弥生（ アルト ）

日替わり弁当配達でレストランの評判もあがり、夜に飲みにやってくるお客さんも増えてきました。ちょっとした居酒屋の感じ。高級和食の板前さんが休みの日にはやってきて「ホッケの開き」（もちろんアイコサン手作り）を肴にまったり。カウンターに一人で座ってアイコサンとお喋りするのを楽しみにする商社マンがいたり。とはいえ、閑古鳥の鳴いている 20 室ほどのホテルをどうしたものか。

ある晩、ぼんやりと元気のないアイコサンに商社マン T さんが声をかけました。

「どうしたんですか？　何か困ったことでも？」

アイコサンはホテルの稼働率をあげられないのが問題なのだ、と打ち明けます。

すると T さん、「じゃあ、うちの長期出張者を一人、送り込みましょう」と即断。酔っ払いの軽口かと思いきや、翌日には本当に、キッチン付きスイートルームの長期滞在契約をしてくれたのでした。「あの商社がホテルを使ってるそうだ」となると、他の商社やメーカーも出張者を送り込んでくる。出張者が単身滞在していれば、夜には同僚が飲みに来る、出張者が「朝ご飯がおいしいんだよー」と言えば、短期出張者も泊まるようになる。こうしてホテル部門も少しずつ、稼働率があがってきました。

累積赤字も止まり、東京の株主たちに少額ながら配当を出せるようになった頃、「私のできることはすべてやったので、後はどなたかが引き継いでください」という爆弾発言がモスクワから届きました。「とりあえず 3 カ月」を繰り返してきたのだから、いつかこんな日がくることは覚悟していたものの、東京は凍りつきました。とりわけ私は全身から血がひくとはこのことか、と怯えました。愛子さんのビザ切り替えのタイミングでモスクワに通ってきたとはいえ、1 ヵ月単位の滞在ではなく、年単位のモスクワ駐在など考えたくもない。しかし、では、誰がモスクワに行ってくれるというのか？

誰もいないので、やはり、私が行くことになりました。「アカの国にやるために産んだんじゃない」と母親に泣かれた時は、そんな表現を使うのか！と半分笑ってしまいましたが、半分は親不孝を心で詫びつつ、1995 年 1 月 15 日にモスクワに到着しました。1995 年というのは、1 月に阪神大震災があり、3 月にオウムのサリン事件があった年です。しかし、朝食作りから弁当配達、夜の居酒屋の配膳と皿洗いで眠る暇もない日々だったし、部屋にはテレビもなく、日本語の新聞もとっていなかったので、私にはほんとうに遠いことでした。アイコサンは私が到着した日の翌日に「じゃあ、よろしくね」とニコニコと別れを告げて以来、なんの連絡もなし。

「母が行方不明なんです」と不穏な FAX がアイコサンの息子から届いたのは、その年の夏頃だったでしょうか。

アイコサンはモスクワに来る前、軽井沢では「瞑想の日々」を送っていたのですが、その時の瞑想のお仲間と一緒に「世界瞑想の旅」に出たようなのです。後に聞いたところによると、インドのゴア、ギリシャのサントリーニ島、イギリスのブライトンに数か月ずつ、滞在していたそうです。ゴアでは瞑想、サントリーニ島では海岸で拾った小石に絵を描いてそれを路上で売ったりもしていたとか。モスクワでの銭ゲバ生活の汚れを洗い流す時間だったそうです。
軽井沢に戻った愛子さんは、今度は家探しに熱中しました。それまで長年にわたって借りていた家は大家さんが亡くなって売却されることになり、退去を求められていたのです。軽井沢仲間の案内で家を探していたところ、茂沢のはずれの家に行き当たり、古い夏用の小屋をくるむように 2 階と屋根裏を増築することになりました。この先、愛子さんの膨大な熱量はこの家と庭に注入されることになります。
モスクワで平穏な日常が続いている間は愛子さんは見向きもしません。しかし、「大家が無体な家賃値上げを要求している」「値上げに応じないなら出ていけと言っている」という非常事態になると、軽井沢からモスクワに飛んできました。対立し、交渉し、事態を治めるとまた軽井沢に去る。
そんな「事態」の中でも最大級だったのが 2004 年。1991 年にリフォームをして営業を続けてきたホテルとレストランを失うことになりました。大家が契約更新を拒んだのです。
東京の斎藤憐も「もう、どうしようもないのか」と、撤退を認めてくれました。「だけど、従業員の生活は大丈夫なんだろうか？」と呟きつつ。
アイコサンとレストランを続けてきたラリーサをはじめとするオバサンたちの顔がちらつきます。ラリーサとその夫のキムさんが親身になって移転先の候補を探してくれました。そしてモスクワ南西部のホテルの 21 階にホテルを、1 階にレストランを移転することになったのでした。しかしここも長くは続けられませんでした。モスクワは好景気が続いていてホテルの稼働率はぐんぐん上がる。そうすると私達に貸している部屋を、自分たちで稼働した方が儲かる、という計算が出てきます。5 年契約だったなんて問題にならない。2007 年の夏、「来年から家賃を二倍にする」と大家が言い出したのでした。アイコサンがモスクワに戻ってきて、ラリーサをまじえて相談の日々。結論は、「ホテルは契約を解除する。レストランは続ける。ただし日本人は帰国。あとのことはラリーサに任せる」　そして 2007 年の大晦日にアイコサンと私は成田空港に到着しました。
明けて 2008 年。リーマンショックが世界を揺るがせました。私はほんとうに、ほんとうに、胸をなでおろしました。もしも家賃値上げに応じてホテルを続けていたら、取り返しのつかない大コケとなっていたかもしれなかったからです。
私は青梅街道沿いのマンションに戻ってモスクワ生まれの猫と共に暮らし始め、愛子

さんは軽井沢に戻りました。時おり電話でおしゃべりをしていると「遊びにおいで」と愛子さんから誘われることもありましたが、なかなか軽井沢に出向く気分にはなれないままに時が過ぎていったのですが、2013 年の夏に 1 週間ほど愛子さんの家に泊めてもらった時、緑に囲まれた茂沢の暮らしに魂を奪われ、2014 年に愛子さんの家から 200m ばかりの家を手に入れ（土地建物まるっと百万円という僥倖にめぐまれ）2015 年夏には移住をしてしまったのは自分でもびっくりでした。

愛子さんはよく歩く人でした。「お散歩いこ」と誘われて呑気についていったら数時間、軽く 2 万歩を超える、なんてことも。 茂沢の家から発地市庭まで歩く（最短で 6 ㎞ほどですが、あちこち寄り道するので片道 2 時間くらい。トイレを借りて、ソフトクリームで糖分補給） 追分宿のはずれまで歩く（ これも最短で 6 ㎞ 神社のブランコを揺らしながら たい焼き を食べる） 紫水京別荘地の山のてっぺんまで行く（最後は道なき道を藪漕ぎ）「牛にひかれて善光寺詣り」という布引伝説ウォーキング大会（2015）では、小諸懐古園から善光寺までの 64 キロも踏破しました（ 私は 33 キロあたりで肉離れを起こしてあえなくリタイア）

春先は忙しくて、山椒の若芽を摘む、こごみを摘む、フキノトウを摘む。ヨモギの若葉、行者ニンニク、タラの芽、コシアブラ。どのあたりに何が出ているか、愛子さんの中には地図が出来ていて、毎年、同じ場所に山菜を摘みに行くのです。

ある時、私たちは「あそこの赤い屋根」を目指すことになりました。冬になって木々の葉が落ちると、峠道の反対側に赤い屋根が見えるようになる。「あれはなんだろうか」と毎年冬になると気になり、春になると忘れる、を繰り返していたのですが、ある時ふと思い出し、「行ってみよう」ということになったのでした。地図で見ると、とある別荘地の裏山あたり。その場に行ってみたのですが、その「赤い屋根」に通じる道はなさそうでした。しかしここでアイコサン発動。「登ってみよう」と、斜面を登り始めたのです。枝や根っこにつかまりつつ、ぐんぐんと登っていくアイコサン。登りはともかく、ここを下ってくるのは無理だろう、と私は怖くなって「帰れなくなるかもしれないから、もう、やめようよ〜」と半泣きでした。すると頭上から一言。「帰り道は考えない！」そのままどんどん登って行ってしまいました。下るのは恐ろしい。もう、登るしかない。必死に登っていくと、なんとそこにはお社がありました。赤い屋根の正体は、お社だったのです。私たちが到着したのは、そのお社の裏側。建物をまわっていくと正面に出て、そこには落ち葉だらけとはいえ参道がありました。バカな私たち。ゆるやかな参道を降りていったら、下の集落（出発した別荘地とは反対側）に出て、集落の人たちが「なんだこの人たちは」という目で私達を見ていました。お邪魔してま〜すと腰を低くしながら集落を通り抜け、道路に出て、車を停めた別荘地まで戻る間、私の脳裏には「帰り道は考えない！」というアイコサンの声が響いていました。

今でも甦るアイコサンの声のひとつに「自立できないオンナはきらい」というのがあります。2015 年に移住を決めた時、私は車の免許を持っていませんでした。愛子さんの車に乗せてもらい、ダメな時はタクシーでいいだろうくらいの軽い気持ちでいたのですが、「自立できないオンナはきらい」の一言で目が覚め、教習所に通うことになり、そして還暦にして運転免許を取得したのでした。
初めて私の運転で佐久方面に出かける日、愛子さんが助手席で道案内をしてくれることになりました。愛子さんはトイプーのマーシャをしっかりと胸に抱いて「死ぬときは一緒」と覚悟を示してくれました。
愛子さんは家具組立のトリセツを読むことを軽蔑していました。あーだこーだと工夫するのが楽しいのだと言い張り、どうにもならないと癇癪をおこしました。
薪を買うことも軽蔑していました。春から秋にかけて、知り合いの伐採現場に残された雑木を引取りに行き、斜面に踏ん張ってチェーンソーで丸切りにし、軽バンに積み込み、家の庭で割って積み上げるという作業を繰り返していました。（私は一度、着いて行っただけで怖気づき、二度と伐採現場には近づかず、薪は感謝と共に買わせていただきます）薪置き場も自分で作ります。薪がどんどん増えるので薪置き場も次々に増設します。敷地に積み上がる薪を眺める愛子さんの笑顔は預金通帳を眺めてご満悦の笑みのようでした。
友人の家が火事になり、焼け残ったウッドデッキの材木をもらってきて、自分でウッドデッキを作りました。デッキといっても高さ 2 メートルくらいのもので、階段もありました。ペットショップで売れ残った猫を引き取ったらトイプーのマーシャを追いかけまわすので家の中に大きな猫小屋を作ったことも。
愛子さんは知り合いの大工さんの仕事をじーっとじーっとじーっと見る、という人でした。そうやって大工仕事を覚えたのです。まさに『野生の思考』（レヴィ＝ストロース）のブリコラージュの人なのでした。

2017 年 7 月初め。愛子さんとホタルを見ました。「木もれ陽の里のちょっと南側の沢でホタルが見られるよ」と教えてくれたのはシンフォの遠山美枝子さん。2016 年 6 月にシンフォに入団してすぐに、隣に座っていた遠山さんが教えてくれて、その夜すぐに見に行って、大感激したので、翌年の 7 月も、愛子さんと一緒に見に行ったのでした。池のほとりでぴかぴか光るホタル。ふわ〜んと浮遊するホタル。空には星も出ていました。
それが愛子さんと一緒に楽しく過ごした最後の夜になってしまいました。
翌日、体調を崩した愛子さんは病院へ行き、不調の原因が分からないままに入院となり、MRI も CT も PET も、ありとあらゆる検査をしても何も特定できず、どんどん具合が悪くなるばかり。「肺に 1ｃｍほどの癌があって、それが腹膜に転移した」とい

うことが判明したのは９月も半ばになった頃でした。ようやく正体が判明したので抗がん剤治療が始められる、とお医者さんが言った時、愛子さんはきっぱりと言いました。「先生、私は抗がん剤はいやなので、家に帰ります。でも痛いのはイヤなので、訪問医療をお願いしたいです。どなたか紹介してください」
先生はあんぐりと口をあけて、口を閉じ、「はい。なるほど。訪問医療ね。はい。わかりました」とどこかに電話をし始めました。
この当時、軽井沢町には包括センターのようなものが存在せず、佐久市のはずれのセンターから看護師のチームが週３回、軽井沢町の往診をしてくれる医師が週１回、来てくれることになり、息子が仕事を休んで同居してくれることになりました。
モスクワにいた頃、愛子さんは「私が死んだら遺骨を粉にして、赤の広場のはずれのあそこの木の下に撒いて」と言ったことがあるので、「他にも撒いてほしい場所はある？」と愛子さんに聞きました。すると愛子さんはふふんと笑って「そんなのは生きてる人の感傷ね。私にはもう、どうでもいいこと」と言い放ちました。わあ、すごいことをおっしゃる、とおののきました。長年の瞑想の目標は、この世界に戻ってくることなく光となって宇宙空間に消えていくことだそうなので、どうやら光になる準備は整っているようでした。
と、思っていたのですが、息子が母に「思い残すこと もうないのかな」と聞いたところ、「たくさんあるに決まってるじゃない！」とブチ切れたそうなので、アイコ魂はそんなに簡単には鎮まるわけもないのでした。
家に戻って２ヶ月後の 11 月に亡くなった愛子さんの「粉」は、愛子さんお手植えのソメイヨシノ（ヨシノちゃんと呼んでいた）の根本、息子を生み育てた藤沢海岸、横浜の外人墓地のお母さんのお墓に撒かれました。イギリスの瞑想仲間がブライトンの海岸にも撒いたそうです。

愛子さんから聞いたエピソードでお気に入りのものをいくつか。
☆パリに旅行に行った時。サンダル履きのウェイトレスがくわえ煙草で料理のお皿を運んできた。「そんなことして、いいんだ！？」と感動して、「なにをしてもいいんだ」という確信をもらった。
☆離婚してシングルマザーとなり、朝は喫茶店、昼は事務仕事、夜は銀座の店のクロークで働いていた。「目標は貯金 500 万 独立してあんみつ屋をやる」　ある冬の夜、新橋の山手線ホームで寒風に震えていた愛子さんは、翌日、貯金をとりくずして毛皮のコートを買った。「あったかかったわよー」 夜の新橋の高架線ホームで毛皮にくるまって眼をきらきらさせている愛子さんが見えるようです。

他にもいくつもの印象的なエピソードがあるのですが、しかし、実は愛子さん亡き後

息子や藤沢時代の親友やお姉さんなどから話を聞くと、私の聞いたエピソードはほんとの話なのかな、もしかすると創作なのかな？と首をかしげてしまうこともありました。
それもまた、アイコサンらしいなあと思います。
雨上がり、道路に水たまりを見つけると車を加速してわざわざ突っ込んでいって水しぶきをあげるのが好きだった愛子さん。帰り道は考えない愛子さん。問題解決には血が騒ぐけれど、平穏な日常には飽きてしまう愛子さん。
私は今も、愛子さんが教えてくれた道順をまもって日々の買い出しに行き、愛子さんのおかげで手に入れた家で平穏な日々を送っています。

【編集後記】
☆名古屋からツルヤへ、そしてシンフォへ。ようこそ鈴木さん。「入団前に万咲に登場」したのが佐々木さんでしたが、鈴木さんは「入団前に TUTTI に原稿」を書いてくださいました。いつかシンフォの合唱にトランペットが響きわたる日が来るかも？と妄想中。（岡田）

■お知らせ
皆さんのご協力のお蔭で TUTTI を毎月発行して来ておりますが、O 編集長の笑顔（きっと目は笑っていない）の原稿催促がお辛い方もあるのではないかと、一方の入稿伺いの気遣いもあるのではないか、と思い至りました。制作部としては楽しみが不定期になるのは残念なのですが、皆さんの幸せのため、このたび毎月発行の「月刊」から「思月刊」＝原稿と編集の都合で不定期発行しても良い「おもいつき刊」に変更させて頂くことにいたしましたぁ〜『次の TUTTI はいつ出るんだー？』と催促されることを夢見て･･･（制作部）